



2 かわいい江戸時代絵画の背景

金子信久 (府中市美術館)



かわいい美術の隆盛の時代

昨今、作り手が「かわいい」という言葉を意識して作品を制作するのは普通のことだし、鑑賞者の側でも、作品の感じ方や語り口にこの言葉が作用することがある。しかし、過去のかawaii美術に関しては、両者にこれと同じ意識が明確にあったとは言いがたい。過去のかawaii美術を見る際には、多様な性格を持つ作品の中に、今日かわいいという言葉で呼べる感性がどう働いているかを考えること、また、当時の社会の中でのありようを見極めることが重要だろう。

平安時代の「鳥獣戯画」や室町時代の御伽草子の絵巻を挙げ、かわいい美術は古くから盛んだったと見る人もいるかもしれない。ただ、「鳥獣戯画」は、伝来等の状況から見て、ほかの絵巻と同様の社会的格式を持つ作品として作られたかどうか疑問である。むしろ、かわいい美術が当時の社会で格式を持つに至っていなかったこと、しかし、格式のある美術とは別の場では、確にかawaiiものが描き楽しまれていたこと、その2点を読み取るべきではないだろうか。また、室町時代の絵巻の「素朴な」かわいらしさが、当時の制作者や鑑賞者の意図によるものかどうかは検討を要する。

ともあれ、かわいい美術の「隆盛」の時代が江戸時代だったことは確かだろう。

江戸時代のかawaii絵画を生んだもの

* 美術の普及

まず、かわいい絵画が隆盛した全般的な基盤として、娯楽としての美術の普及が考えられる。特に江戸中期以降、町人の生活に美術が浸透したことは大

きい。そもそも、円山応挙や伊藤若冲ら、この時代の新しい流派や画境の開拓者の多くは、町人である。応挙や若冲は、伝統的芸術を保持してきた寺社や有力者とのつながりを持ちつつ町人の社会で増える

需要に応え、また、

ほかの多くの町人画家たちが活動するに至った。そうした状況下で、宗教や権力との関係も強かった美術という営みが、もっと気軽な、純粋な目や心の娯楽として確立されたかに見える。応挙の子犬の絵のような、誰もが喜ぶかわいらしい絵を飾る楽しみが広がり、また、出版の普及に伴い、老若男女が興味を持つ本が数多く出された。たとえば鋤形蕙斎の『鳥獣略画式』(図-1)のように、多くの人が見て楽しんだり描いたりできる絵手本が出現している。



図-1 鋤形蕙斎『鳥獣略画式』より 寛政9年(1797)

* 仏教

次に、思想的な背景として大きなものが、仏教である。

特に注目されるのが禅画である。中世から描かれてきた禅画には、かわいらしさが強調された表現が見られる。たとえば、恐ろしいはずの虎が豊干禅師と一緒に眠る光景(図-2)などは、彼らが世俗を超えた境地にあることを示すものである。禅画は宗教的目的のために描かれたが、江戸時代になると、禅の普及とともに、その画題が鑑賞画としても描かれるようになった。人々は、思想的な深みを味わい

つつ、造形の魅力を楽しんだのだろう。江戸時代に多く描かれたかわいい虎の絵にも、禅画のイメージからの影響が考えられる。

もう1つは、生き物にも人と同じく仏性があるとする教えである。この時代、人々と寺院の関係は今以上に深かったが、たとえば、毎年、涅槃会の際に拝する涅槃図には多種の生き物が描かれている。臨終の釈迦の周りで弟子

たちとともに嘆き悲しむ生き物の姿は、人と同じ心を持つものとしての動物観を実感させただろう。また、生き物を自然に放つ「放生」の精神の普及に尽力した僧もいた。江戸時代には、中国伝来の吉祥画としても動物の絵が描かれている。しかし、森狙仙による、まるで人間同士のような猿たちの情景や、思わず抱き上げたくくなるような応挙らの子犬の絵の流行などを見るにつけ、単なる吉祥画題を超えた、動物の心や命の営みに迫った作品が愛された状況が窺われる。

＊描写の高精度化、簡略描写の価値

かわいい絵画の隆盛には、絵画の様式や技法に由来する背景もある。

応挙は、目に映る対象のありさまを画面に表すという、現代から見ればごく当たり前とも思える新しい絵画の在り方を確立した。それまでの絵画では、形を大まかに捉え、そこに造形としての美を付加してきた。つまり、本物の動物や子供の愛らしさが再現されてきたわけではないが、応挙は、人がかわいいと感じるものを画面に再現的に表した。子犬の絵（図-3）はもとより、子供を描く際にも「子供らしさ」が表されるようになった。そして、応挙による絵画の高精度化は、かわいいものの質感や表情を絵にすることを一般化したのである。

対照的に、簡略な描写の魅力や価値も明確になった。その1つが、江戸前期に生まれた俳画である。そもそも俳諧という語には滑稽や戯れの意が含まれているとされるが、芭蕉の「古池や」の俳画として重厚精密な絵が想像できないように、やさしい感覚やお



図-2 伊年印《四睡図》(部分) 江戸時代前期 (17世紀)



図-3 円山応挙《麦穂子犬図》(部分) 明和7年(1770)

かしみを伴う造形が必要となる。また、中国に発する南画は、朴訥な描法の中に描き手の心境を率直に表現したもので、江戸中期以降に流行した。意図的な非技巧的描写によって表現された味わいや、拙いものに心をくすぐられるような感覚を含む作品も多い。

その後の変貌

江戸時代に花開いたかわいい絵画だが、明治時代以降、こうした様相は続かなかった。

理由の1つには、社会における絵画の在り方の変化が考えられるだろう。欧化政策を背景に美術の西洋化が生じ、技法面だけでなく美術の価値体系そのものが影響を受けるに至った。西洋にもかわいらしさを表した美術はあるが、壮大、重厚、深淵なものに社会的価値を認める伝統がある。近代芸術の規範を西洋に求めた洋画家はもとより、日本画家もまた、西洋的な意味での芸術であることへの意識を強く持つようになったのである。描法の面でも、あらゆる画技の基礎を西洋流のデッサンに求める考えが浸透した結果、自由な画法を探究する志向は薄れたと言える。そんな中で、昭和初めに武井武雄が「童画」という場を開いたあたりから、かわいいものの表現は、新たな積極的表現領域として活気づいたように見える。

(2015年9月29日受付)

金子信久

1962年生まれ。福島県立博物館を経て現職。著書『かわいい江戸絵画』（府中市美術館編、共著、求龍堂、2013年）、『たのしい日本美術 江戸かわいい動物』（講談社、2015年）ほか。